

神様の人格

七月中旬、京都で開かれた東西宗教交流学会に参加した。今年は「絶対者の人格性と非人格性をめぐって」というテーマで、仏教とキリスト教の学者ら約四十人が三日間にわたって議論をした。

キリスト教の神は、しばしば「人格神」と呼ばれる。旧約聖書には「神は御自分にかたどって人を創造された」とあり、しばしば人間の言葉でも語りかけている。人はその命令を聞いて善行に励むが、一方でその名のもとに戦争などの悪も正当化されてきた。しかし、そもそも「神様の人格」という言葉はおかしい

善	南
財	無

菅原伸郎

し、その人格とは何なのか、といったことが討論になった。

仏教にも阿弥陀仏や大日如来があり、人間の形に似た仏像の前に善男子、善女は手を合わせている。そうなる、仏の「人格性」を問うてもよさそうだが、議論はあまりされてこなかった。なぜだろうか。

仏教には「方便」という思想があるからだろう。キリスト教だけでなく、大多数の宗教は神や絶対者を実在する対象と見ている。しかし、仏教を勉強した人なら、だれでも方便

とか方便法身という言葉を知っている。「うそも方便」といったことではなく、すぐれた教化方法、巧みな手段、といった積極的な意味だ。

たとえば、西方浄土に阿弥陀仏という「実体」があるのではない。あくまで「無限」の象徴であり、それを無量寿・無量光として建てたところに仏教のおもしろさがある。本当の教えは「無」だろうが、それではあまりに茫漠としている。そのままでは、怪しい世界に取り込まれかねない。そこで、方便法身となったのだろう。星野元豊・元龍谷大学学長は一九五七年にこう書いている。

《阿弥陀仏への帰依と浄土への願生が偶像崇拜と異なるところは、それがその本来的な目標ではなくして、

あくまで方便であるということである。偶像崇拜はそれが本来的な目標であるのに対して、方便法身はそれが本来的な目標でないところにある》(法蔵館『浄土』)

しかし、そうはいっても、仏教徒はあたかも実体のように仏を拝んでいるのではないか、という意見は当然だろう。カトリック哲学者の田中裕・上智大学教授は、若き鈴木大拙が西田幾多郎に送った英文の手紙を例に挙げて論じた。日露戦争で弟を失った親友を慰める十四行の詩で、その一節はこうなっていた。

Eternal Void, would thou allay
our heart! (汝、永遠の空よ、我
らの心を癒したまえ)

ここでは、仏教的概念の「永遠の

空」が「汝」と呼びかけられている。人格あるものの如くであり、神とそっくりだ、という指摘だった。

この問いには、さまざまな答えがありえるだろう。上田閑照・京都大学名誉教授は「空や無の世界には、たしかに言葉がない。しかし、日々の生活では何らかの表現があつていい」といった説明をされた。そして、私は片隅で『一遍上人語録』(岩波文庫)の逸話を思い出していた。

参禅した一遍が「となふれば仏もわれもなかりけり南無阿弥陀仏の声ばかりして」という歌を法灯国師に提出したが、「未徹在」と突き返された。改めて「となふれば仏もわれもなかりけり南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と作り直したところ、ようやく印可が下りた、という。たしかに「声ばかりして」という認識の主体が残っていた第一作に比べて、改作ではその我執が消えている。

さらに考えると、主体の「我」がないなら、客体の「汝」もないはずだ。そうであれば、「汝よ」と呼びかけた大拙先生の作品は「未徹在」だった、といえようか……。

(すがわら・のおお)

東京医療保健大学教授

